日本語学習者はどのような外の関係の名詞修飾節を使っているか

大関　浩美

要　旨

本研究では、KY コーパスで韓国語・中国語・英語母語話者が使用した外の関係の名詞修飾節を取り出し、学習者がどのような外の関係を使用しているかを分析し、また日本語母語話者の使用と比較した。その結果、①「陳述度が高い修飾節に「話」「考え」などの名詞を付加する形」と「陳述度の低い形容詞的な修飾節」の二つのタイプの外の関係が多く使われる、②中国語母語話者以外は日本語母語話者に比べ被修飾名詞の異なり数は多くない、③付加するかどうかの規則が非常に複雑である「という」に関しては、母語話者の使い分けに近いものになっている、ことがわかった。本研究では、これらの結果から、学習者の外の関係は、修飾構造を体系として捉え生産的に広げていくというよりも、記憶された個々の用例を中心に進む(N. Ellis 2003)のではないかという議論を行なう。

【キーワード】第二言語習得、　名詞修飾節、　外の関係、　「という」

1. はじめに

名詞修飾節は、複雑な構造の代表として、習得研究の対象として取り上げられることが増えてきたが、その中心は、英語等の関係節にほぼ相当する「内の関係」である。しかし、日本語の名詞修飾節の大きな特徴の一つとして、後に詳しく述べる「外の関係」の存在があり、学習者がどのように「外の関係」の修飾節(以下、外の関係)を習得していくかということも重要な研究課題となるはずである。にも関わらず、外の関係を対象とした習得研究は非常に少なく、学習者がどのような外の関係を使っているか、何が使われ易く何が使われにくいか、といった基本的なことすら、ほとんどわかっていない。本研究では、第二言語としての日本語学習者がどのような外の関係を使っているかを分析し、外の関係の習得過程を明らかにするための足がかりとしたい。

2. 「内の関係」と「外の関係」

「内の関係」と「外の関係」(寺村 1975)の区別は、日本語の名詞修飾節の最も代表的な分類である。内の関係は、「底の名詞」(被修飾名詞)が「修飾部に対して、それに何かの格助詞をつけて修飾部と結びつけることができるような関係」(寺村 1981: 92)とされ、それに対して外の関係は、「底の名詞にどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができない」修飾関係とされている(寺村 1975: 109)。次の例(1)では、被修飾名詞「男」に「が」という格助詞をつけて、「男がさんまを焼く」のように修飾節の中に納められるため、内の関係である。しかし(2)では、「匂い」を「さんまを焼く」という修飾節に、どのような格助詞を使っても納めることができず、外の関係とされる。

(1)[さんまを焼く]男

(2)[さんまを焼く]匂い　　(寺村 1975)

寺村(1975)は、外の関係をさらに「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分けている。「ふつうの内容補充」は被修飾名詞の内容を説明するものである。寺村(1981)では「内容節」と呼び直されており、次のようなものが含まれる。前掲の(2)は(5)と同様に「知覚の内容」に分類される。

(3)[友だちが選挙に出る]という噂　　(発話・思考の内容)

(4)[あまり話さない]性格　　(コトの内容)

(5)[ドアを開ける]音　　(知覚の内容)

また、内容節は、被修飾名詞によって、修飾節と被修飾名詞の間に①「という」が必要である、②「という」をつけられない、③どちらでも可能、の3 通りがある。「発話・思考の内容」は全体的には「という」を必要とするとされているが、どちらでも可能なものもある。「コトの内容」は逆に、「とい

う」をつけられないものも多いが、やはりどちらでも可能なものもある。「知覚の内容」は「という」はつけられないとされている(寺村 1977b)。しかし、どのような場合に「という」が使われるかに関しては、多くの議論がある(大島 2010 参照)。

一方、「相対的補充」(以下、「相対節」)は次のようなものである。(6)は、「翌日」に深酒をしたわけではなく、「深酒をした日の翌日」と解釈しなければならない。(7)も、文子がうしろに座ったのではなく、「文子が座った場所のうしろ」である。これらの表現は、「当日」と「翌日」、「前」と「うしろ」等の相対的概念を利用した名詞修飾節であるとして、相対節とされている。このタイプの修飾節では「という」は付加できないとされている。

(6)[深酒をした]翌日

(7)[文子が座った]うしろ　　(寺村 1977b)

3. 外の関係の習得に関する先行研究

日本語の名詞修飾節を対象とした第二言語習得研究は、ほとんどが内の関係を対象にしており、外の関係を扱ったものは少ない。特に、英語等の関係節を対象とした習得研究で、被修飾名詞と修飾節の文法関係の習得難易への影響を調べる研究が盛んに行なわれているため(Gass 1979; Eckman, Bell & Nelson 1988 等)、日本語を対象とした研究でも、英語等の関係節にほぼ相当する内の関係を対象に、同様の研究を行なったものが多い(坂本・窪田 2000; 大関 2008; Ozeki & Shirai 2007 等)。

外の関係を対象としたものでは山中(1999)の研究がある。山中は英語の構造との比較を取り入れながら外の関係を分類し直し、「感覚名詞」(例：ガスが漏れている匂い)、「因果名詞」(例：5 千円払ったおつり)、「位置名詞」(例：彼女の座っている後ろ)という枠組みで分析を行った。日本語上級学習者(母語は英語)6 名を対象に、例文を読ませて理解時間を測定し、英訳をしてもらい、難易度の評価をさせた結果、「感覚名詞」の理解が一番易しく、「因果名詞」「位置名詞」の順に難易度が上がるという結果が得られた。ただし、「発話・思考」「コト」に入るものはほとんど対象とされていない。

産出を見たものでは、窪田(1997)が、上級日本語学習者 19 名(英語、中国語、インドネシア語母語話者)を対象として、被修飾名詞と修飾節との文法関係による難易を見るために、二つの文を一つに結合させるテストを行なっているが、その中に外の関係も含めている。その結果、外の関係は、母語に関わらず難易度が高いことが報告されている。

口頭での使用を調べた研究では、長谷川(2002)が日本国内の小学校に通う児童 36 名(母語は中国語・ベトナム語・ラオス語・カンボジア語)にインタビューを行ない、使われた名詞修飾節を分析している。その結果、外の関係が比較的多く使われていたが、使われた名詞修飾節は 36 名の使用数の合計が 59 例で、非常に数が少なかった。

大関(2008)は、日本語学習者の使用した名詞修飾節を大規模に調査した研究の中で、内の関係を中心にしながらも、外の関係についても簡単な考察をしている。分析されたデータは、自然習得中心の学習者 5 名(母語はタガログ語)へのインタビューと、初級学習者 3 名(母語は、ロシア語、テルグ語、マラティ語)の発話を収集した縦断データ、および本研究でも分析対象とする KY コーパス(英語・中国語・韓国語母語話者各 30 名を対象とした OPI インタビュー)である。分析の結果、自然習得中心の学習者と縦断データの初級学習者では、外の関係の使用は非常に少なかったが、KY コーパスでは中級レベルから使われていることが報告されている。

使われた外の関係は、母語・レベルを問わず、「って」「っていう」「というような」などを使って、「話」「意見」「考え」などの被修飾名詞と接続させる形が多く使われていたとしている。大関(2008)は、内容をまず述べて最後に「話」「番組」「考え」などの名詞を付加するだけで作れたり、「という」で節と名詞をつなげることができる修飾節は、形さえ覚えれば使いやすいのかもしれないと述べている。また、「～という感じ」「～という気がする」のような表現を多用している学習者もおり、フレーズとして覚えて、モダリティ表現のように多用しているのではないかとしている。一方、「魚を焼く匂い」のような「知覚」の内容の使用は、観察されなかった。

しかし、大関(2008)では詳細な分析をしているわけではなく、目立った傾向を指摘しているのみで、学習者がどのように外の関係を使っているのか、またレベルが上がるにつれ、それがどう変わっていくかは報告されていない。また、「という」で繋ぐ形が多く見られたとしているが、どのような外の関係に「という」が付加されたかという詳細な分析はされていない。前述のように「という」を付加するか

しないかは複雑な規則だが、学習者が名詞修飾節における「という」を使うようになっていく過程も、明らかになっていない。そこで、本研究では、大関(2008)が使用したデータの一部である KY コーパスで使われた外の関係を詳細に分析し、学習者がどのような外の関係を使用しているのか、またレベルが上がるにつれてどう変わっていくのかを調査する。

なお、内の関係と外の関係の 2 分類に対しては批判もあり(高橋 1979; 加藤 2003 等)、すっきりと分けられないものも多い。また、格関係という観点から日本語名詞修飾節を分析すること自体にも疑問が投げかけられている(Matsumoto 1997; 加藤 2003)。しかし、現時点では最も一般的に使われる包括的・体系的な分類であるため、学習者がどのような外の関係を使っているかを見るための最初の足がかりとして、寺村の分類を使うこととする。

4. 研究方法

4.1 使用するデータ

90 名の OPI インタビューを文字化した「KY コーパス」(鎌田 1999 参照)を使用する。対象者の母語は、英語、韓国語、中国語(各 30 名)、レベルは母語ごとに、初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名である。インタビュー時間は 1 人 30 分以内である。また、日本語母語話者の使用傾向を知るために、日本語母語話者を対象に OPI と同じ形式で行われたインタビューのコーパス「インタビュー形式による日本語会話データベース」(詳細は上村 1997)から、20 名分を無作為に抽出した。

4.2 分析方法

コーパスから学習者および日本語母語話者が使用した名詞修飾節を取り出し、内の関係と外の関係に分類した。何をもって名詞修飾「節」とするかという問題があるが、本稿では、①動詞が名詞を修飾しているものすべて(「食べる物」のような動詞 1 語による修飾も含める)、②形容詞が補語を伴って名詞を修飾しているもの(例:「髪が長い人」)を分析の対象とした。①または②の形式になっていれば、被修飾名詞の前に「の」が過剰使用される誤りや述語の活用形等の誤りがあっても、分析の対象とした。ただし、「はず」「とき」「わけ」などの形式名詞を被修飾名詞としたものは分析から除いた。形式名詞とする名詞については寺村(1978, 1981)に基づいた。内の関係と外の関係の分類は、被修飾名詞に格助詞をつけて修飾節の中に戻す方法を用いた。ただし、被修飾名詞と修飾節に文法関係が見出されないものの中には、「頭のよくなる本」のように、「短絡」(寺村 1977a)とされているものや、その他様々なものが指摘されており、そのような修飾節は外の関係にも含めず、「その他」とした。

さらに寺村(1977b)に基づき「内容節」「相対節」に分け、「内容節」を「発話・思考の内容」「コトの内容」「知覚の内容」(以下、「発話・思考」「コト」「知覚」)に分類した。また、「という」の有無、「という」以外の「ような」「ふうな」などの有無(例:[アメリカの企業を日本へ連れていく]というような仕事)についてもコードづけを行なった。

5. 結果

5.1 全体的な使用傾向

日本語学習者が使用した名詞修飾節は合計 1,006 例であった。使用傾向は表 1 のとおりである(大関 2008 参照)。母語・レベル別に使用数を挙げたが、前述のようにレベルにより人数が異なるため、上段にレベルごとの全使用数、下段に一人当たりの平均使用数を挙げた。日本語母語話者 20 名からは合計 332 例の名詞修飾節を分析した。母語話者一人あたりの平均使用数は、16.6 例であった。

表 1　KY コーパスにおける名詞修飾節使用数

母語	レベル	全使用 平均	母語	レベル	全使用 平均	母語	レベル	全使用 平均
韓	初	2 0.4	中	初	2 0.4	英	初	0 0
	中	94 9.4		中	45 4.5		中	32 3.2
	上	166 16.6		上	151 15.1		上	187 18.7
	超	173 34.6		超	78 15.7		超	78 15.6

どのレベルでも、名詞修飾節を多用する学習者から、使用が非常に少ない学習者まで、個人差が大きかった。この個人差は日本語母語話者にも見られたため、名詞修飾節の使用には、個人個人のスピーチ・スタイル、どんな話題を選ぶかなど、使う能力以外の要因も影響していると考えられる。

次に、外の関係の使用数および名詞修飾節に占める外の関係の割合を表 2 に示す。使用割合は、各個人の名詞修飾節使用数に占める外の関係の比率を

出し、その平均使用比率を出した。これは、学習者全体の名詞修飾節使用数のうち外の関係が占める割合という計算をすると、使用数が多い学習者の数値が強く反映されてしまうためである。

学習者全体では 274 例の外の関係が使われていた。初級では外の関係の使用はなく、中級では、外の関係の平均使用比率は 10～20%、上級・超級では 20～30%となっている。ただし、上級・超級でも、外の関係を全く使っていない学習者から、外の関係が 8 割を占める学習者まで、個人差が大きい。

表 2　学習者の使用した外の関係

母語	レベル	全数 平均 割合	母語	レベル	全数 平均 割合	母語	レベル	全数 平均 割合
韓	初	0 0.4 0%	中	初	0 0.4 0%	英	初	0 0 0%
	中	14 1.4 11%		中	6 0.6 22%		中	9 0.9 18%
	上	40 4 20%		上	51 5.1 23%		上	67 6.7 37%
	超	40 8 23%		超	23 4.6 30%		超	24 4.8 24%

日本語母語話者は合計 109 例の外の関係を使用しており、一人平均 6.5 例であった。使われた修飾節のうち外の関係の占める割合は平均 35.3%であった。日本語母語話者も、0%から 80%まで個人差が大きいものの、使われた名詞修飾節の 3 分の 1 が外の関係だということになる。したがって、あくまでも傾向ということにはなるが、日本語学習者の外の関係の使用割合は全体的に母語話者に比べると低い。

5.2 外の関係の種類

次に、使われた外の関係を、「発話・思考」「コト」「知覚」「相対節」に分けた結果を示す。外の関係の使用割合と同様に、比率の平均を出した。学習者の結果を、表 3 に示す。中級段階では「コト」が最も高い割合で使われ、上級以上になると、「発話・思考」の割合が増える。一方、日本語母語話者の使用では、「発話・思考」が 26.2%、「コト」が 52.5%、「知覚」が 4.3%、「相対節」が 17.1%で、「コト」が最も高い比率で使われていた。

5.3 中級レベルの学習者の使用した外の関係

中級レベルでも外の関係は使われてはいるが、各母語 10 名の学習者のうち外の関係を使用したのは、韓国語母語話者 6 名、中国語母語話者 3 名、英語母語話者 2 名で多くはない。さらに、各学習者の使用は 1 例から 2 例と非常に少ない。5 例使用した学習者(韓国語母語話者)や 8 例使用した学習者(英語母語話者)もいたが、被修飾名詞の異なり数はそれぞれ 3 例、5 例で、異なり数は多くない。使われた被修飾名詞は前述のように「コト」を表わす名詞が圧倒的に多く、「知覚」の名詞は使われていなかった。学習者の使用した被修飾名詞を表 4 に示す。

表 4　中級学習者の外の関係の被修飾名詞

	発話・思考	コト	相対節
韓	気	話(2)　番組(2) 事故(2)　現象 練習　記憶	理由 原因 途中(3)
中		物語　サービス 仕事　力 範囲　条件	
英	考え方 感じ(2)	話(2)　映画 勉強　予定(2)	

「発話・思考」では、「気」「感じ」「考え方」の 3 種類の被修飾名詞が使われていた。「相対節」で使われた「原因」「理由」「途中」は、主に表現として教えられるものである。「コト」に関しては、寺村(1977b)がさらに下位分類しているが、中級学習者の使用は、その中の「「事実」「事」「事件」「話」など」のカテゴリーに入るものが多い。これらは、「番組」「物語」「映画」「話」などが被修飾名詞となっており、OPI のこのレベルでのインタビューが、

表 3　学習者の使用した外の関係における「発話・思考」「コト」「知覚」「相対節」の割合

レベル	母語	発話・思考	コト	知覚	相対節	母語	発話・思考	コト	知覚	相対節	母語	発話・思考	コト	知覚	相対節
中	韓	8%	63%	0%	29%	中	0%	100%	0%	0%	英	19%	81%	0%	0%
上		58%	39%	2%	0%		32%	45%	13%	10%		38%	58%	0%	4%
超		44%	50%	1%	4%		34%	54%	3%	10%		59%	40%	1%	0%

最近見た映画やテレビ番組などの話をさせることが多いため、それらの内容を伝えるために、このような外の関係が使われていると考えられる。「事故」「現象」もここに含められるだろう。このカテゴリーは、寺村(1977b)が、「発話に関係があるとも言える」と認めながらも、「という」無しで使われることが多いという構造的な点から「発話性の名詞」よりも「コト性の名詞」に分類したほうがいいとしているものである。次のようなものが使われているが、修飾節がかなり長いものも見られる[1]。

(8)[その女の子は、あの違う彼氏がいたから、〈うん〉あのー、とらさんがそのー、その子の、あの相談、相談相手になって、〈うん〉その子は、あの結局とらさんでなくてその彼氏と結婚した]話です。(英・中級)

(9)[でもあとは、夫婦よくけんかします] 〈はー〉という物語です。 (中・中級)

(10)[オートバイを、オートバイに乗って、いる人を、乗っていく人を、〈ん〉バスが後ろでぶつかって、〈あーあー〉人が死んだ] 〈あーそう〉事故でした。 (韓・中級)

これらの修飾節は、11 例中 10 例が上の例のように、「修飾節+名詞+です」という形で使われている。つまり、話や出来事の内容を普通の文のように述べて、そのあとに「話です」「物語です」のように「名詞+です」を付加し終わらせるという単純な構造で使用されている。寺村(1977b: 34)は、外の関係の分類を「陳述度」という観点から説明しており、「発話→思考→コト→知覚・相対節」という順で、修飾節の陳述度が減っていく(後ろにあるものほど陳述度が低い)としている。陳述度が高いということは、完全な文に近いということである。「話」「物語」などを修飾する修飾節も、「コト」に分類はされているが、「発話に関係がある」とされており、陳述度は高いと言えよう。修飾節部分がかなり長いものも使われていることから、話や出来事の内容を普通の文のように述べる陳述度の高い修飾節に名詞を付加し「です」で終わらせる構造は、学習者にとって早くから使い易い可能性が考えられる。

一方で、「サービス」「仕事」は、寺村(1977b)の「「作業」「仕事」「役割」など」の分類に含まれ、「勉強」「練習」「力」は「修飾節が「…スルタメノ」あるいは「…スルダケノ」ということを表わす」とされるカテゴリーに含まれる。これらの名詞にかかる外の関係は、動詞の形はル形のみで使われ、陳述度は低い。学習者の使用も、次の例のように短い修飾節である。これらは、寺村(1981)が、「底の名詞に対する形容詞のような役割になっている」と指摘するタイプの典型的なものと言える。

(11)[共有料金を〈うん〉払う] そのサービスもあります。 (中・中級)

(12)後の時間は[読む]練習をしました。 (韓・中級)

(13)なぜあの経済、の勉強から、〈えー〉あのー[日本語のー、日本語、日本語を、教える]勉強に、変えたんですか。 (英・中級)

このように、中級レベルでは、大きく分けて、「陳述度の高い修飾節+名詞です」という形と、逆に陳述度が低く形容詞に近い修飾節、という二つのパターンが中心に使われていると言える。

5.4 上級以上の学習者が使用した外の関係

5.4.1 「コト」の内容を表わす修飾節

上級以上になると使用数は大きく増えるが、全く使用していない学習者(英語母語上級・韓国語母語上級各 1 名、中国語母語上級 2 名)から、19 例使用している学習者(英語母語上級、韓国語母語上級各 1 名)まで、やはり個人差が大きい。中級では前述のように圧倒的に「コト」を表わすものが多かったが、上級以上では「発話・思考」が増えてくる。

「コト」を表わす名詞に関しては、中級から使われていた「話」以外に、「タイプ」「機会」「可能性」などが複数の学習者によって使われていたが、全体的には様々な名詞が少数例ずつ使われていた。特に上級から多く使われていたのは、寺村が「「方法」「準備」「資格」「目的」その他、内容の修飾節が「…スルタメノ」あるいは「…スルダケノ」ということを表わす」としているものであった。これらの修飾節は、前述のように、修飾節の動詞がル形で接続するものであり、陳述度は低い。ここに分類されるものを含め、「話」「事件」などの内容を表わすもの以外の「コト」に関しては、中級レベル同様に、上級学習者が使用したものの多くはル形で終わる修飾節であった。上級のうち「上級の上」と判定されたレベルや超級になると、次の例のようにル形以外の形で接続する修飾節が使われるようになっている。

(14)韓国の時はやはり、[友達といて楽しかった]という思い出が、〈んー〉一杯あるんですけど。 (韓・超級)

(15)[6 年、7 年間も日本に、日本で勉強してきた] 生活にも、あの、区切りを、付けることになりましたけれども。 (中・上級)

5.4.2 「発話・思考」の内容を表わす修飾節

一方、「発話・思考」に関しては、全使用 126 例の多くは「思考」の名詞で、「発話」に当たるものは 8 例のみだったが、いずれにしても、次の例のように陳述度の高い修飾節に名詞を付加するという形で使われている。

(16)[それを何とかして、〈ええ〉直そう] という意識がぱっーと盛り上った〈えーえー〉んで。 (韓・超級)

(17)[女性は女性らしい、〈うーん〉つまり、髪は長くて、〈うん〉姿勢は正しく、教養、教養もあるほうが〈ん〉いい] という認識がまだ残っているんですね。 (韓・上級)

(18)国民から、〈はい〉[だめですよ] っていう声が〈うん、うん〉高い。 (英・上級)

多くの学習者が何度も使用していたのが、「感じ」(49 例)、「気」(19 例)、「気持ち」(12 例)であった。これらは大関(2008)で指摘されているように、モダリティ表現として使用されていると考えられる。特に上級英語母語話者の場合、外の関係の 67 例のうち 26 例を、「感じ」「気」「気持ち」が占めおり、「～という気がする」「～という感じです」のようなフレーズとして多用する学習者も見られた。

前述のように、中級レベルでは「話」「映画」などの内容を述べて名詞を付加する形が多く使われており、陳述度の高い修飾節で話や出来事、考えなどの内容をそのまま述べ名詞を付加するという形の構造は、レベルを問わず使われ易いと考えられる。

5.4.3 被修飾名詞の異なり数

上述のモダリティ表現のように使われる外の関係以外で、上級以上の学習者が比較的使用した被修飾名詞は、「発話・思考」では「考え方」「印象」、「コト」では「話」、「機会」、「タイプ」などがあるが、これらも多くの学習者が使用しているのではなく、数名の学習者が使用し、一人で複数回使用した学習者がいるために、使用数が多くなっている。

このように、同じ被修飾名詞を使った修飾節を繰り返し使用している学習者が多く観察される。たとえば、9 例の外の関係を使用した上級英語母語話者は、4 種類の被修飾名詞(「タイプ」3 例、「感じ」3 例、「気」2 例、「アルバイト」1 例)しか使用していない。19 例使用した上級英語母語話者も、異なり数は 9 例、15 例を使用した超級韓国語母語話者も異なり数は 6 例であった。

そこで、各学習者の外の関係に使われた被修飾名詞の異なり数を求め、使用数における異なり数の割合(Type/Token ratio: TTR)を求めた[2]。TTR は、異なり数を使用数で割る方法で求めるため、すべて異なる被修飾名詞を使っていれば TTR は 1 となり、1 に近ければ使用された被修飾名詞の種類が多いことになる。外の関係の使用例が 1 例しかない学習者(9 名)を除き TTR の平均を出した結果を、表 5 に示す。同様に算出した日本語母語話者の平均 TTR は、0.86 であった。学習者の平均 TTR は、中国語母語話者を除き、日本語母語話者の平均よりも低い。特に、上級英語母語話者の TTR が 0.59 と最も低くなっている。上級英語母語話者は、表 2 に示したように、一人平均の外の関係使用数は 6.7 例であり、上級韓国語・中国語母語話者よりも多いが、異なり数は少ないことになり、同じ被修飾名詞を使った外の関係を繰り返し使用していることになる。

表 5　外の関係における被修飾名詞の TTR

母語	レベル	TTR	母語	レベル	TTR	母語	レベル	TTR
韓	超	0.70	中	超	0.92	英	超	0.74
	上	0.71		上	0.87		上	0.59

さらに、外の関係を 10 例以上使用した学習者(韓国語母語話者 3 名、中国語母語話者 2 名、英語母語話者 3 名)の平均 TTR を求めると、0.64 であった。使用数の多い学習者の TTR が低いことを考えると、学習者は外の関係を多く使っていても、同じ被修飾名詞の外の関係を繰り返し使うことで使用数が多くなっていることが言える。なお、中国語母語話者の TTR が高いことに関しては、推測以上のことは言えないが、漢字圏の学習者であるため、外の関係の被修飾名詞に多く使われる抽象的な漢語が使い易い可能性が考えられる。

5.5 「という」の使用

最後に「という」の使用について見る。前述のように「内容節」の下位分類には、「という」が必要かどうかが基準の一つとされている(寺村 1977b)。「発話・思考」の場合は「という」が必要とされるものが多く、「コト」の名詞では、「という」が付加

できないもの、および付加してもしなくてもよいものがある。「知覚」の名詞と「相対節」では、「という」はつけられない。そこで、使用された外の関係の各分類ごとに、「という」の有無を調べた。「という」には、「っていう」「って」を含めた。また、「という」以外に、「ように」をつけたり、「というように」という形で使ったりするものもあったので、その数も挙げた。

まず、「という」が付加できないとされる「相対節」と「知覚」の名詞に関しては、使用数自体も少なかったが、学習者は全く「という」を使用していなかった。「発話・思考」と「コト」の結果は、表6に示す。日本語母語話者の使用では、まず「発話・思考」に関しては、寺村(1977b)の指摘どおり「という」が使われたものが多い。「という」が使われない場合でも、「ような」が使われたものが4例あり、何も使われず修飾節が直接接続されたものは、3例のみであった。一方、「コト」の名詞では、日本語母語話者の使用では、「という」が使われたものと使われないものが、ほぼ半数ずつになっている。興味深いことに、学習者の使用も、全体的に、「発話・思考」では「という」が使われ、逆に「コト」の名詞では、使われないもののほうが多いながらも、使われたものも使われないものもどちらも観察されており、母語話者の使用傾向に近い。

学習者の「発話・思考」では、「という」が付加されない例は34例あるが、そのうち18例は「ような」が使われており、何も使わずそのまま名詞に接続させているのは16例であった。16例のうち13例は、「感じ」「気持ち」「気」の三つの名詞を修飾しているもので、前述のようにモダリティ表現のように使われているものである。これらは、次の例(19)(20)のように「という」がなくても問題なく使える。残りの3例でも、「という」がないために不自然になるものは1例のみ(例21)であった。

(19)[中国では、無論ありえない]気もしますが。
(中・超級)

(20)[違う電車に乗って、えっ、違う方向に行ってる] 感じ。(英・上級)

(21)それで、[日本語を習う] 考えをもって勉強しています。 (韓・上級)

一方、「コト」の名詞のほうでは、「という」が使われたものも使われないものもあったが、不自然な「という」の使用は次の例のみであった。

(22)[人を殺すこと一]という映画ですけど、
(英・中級)

「という」をどのような時につけるかに関しては様々な議論があるが、前述のように寺村(1977b)は、陳述度が高くなればなるほど「という」が必要とされ、陳述度が低く「叙述内容」を表わすだけの修飾節になると「という」は不要となるとしている。実際、学習者が「という」をつけずに「コト」の名詞を修飾している例を見ると、全体的に次の例のように、陳述度が低いものが多い。

(23)わりとまあ[見る] 価値はあると思うんですけど。 (中・超級)

(24)[同居する] ケースが多いんです、台湾のほうは。 (中・上級)

(25)[一応、一生懸命なんでもする]〈うんうん〉タイプです。 (英・上級)

また、前述のように学習者は上級以上になると、徐々に、修飾節が普通体で終わるものだけでなく、意向形や終助詞、「〜しない?」という形で終わる陳述度の高い修飾節も使用している。寺村によれば、

表6 「発話・思考」「コト」の修飾節における「という」の使用

		発話・思考				コト			
		という	というような	ような	ゼロ	という	というような	ような	ゼロ
日本語母語話者		24	0	4	3	32	3	2	29
韓	中	0	0	0	0	1	0	0	7
	上	14	0	4	5	4	0	0	10
	超	15	0	1	2	14	1	1	4
中	中	0	0	0	0	3	0	0	2
	上	16	2	2	1	10	1	3	12
	超	2	1	4	1	1	1	1	10
英	中	2	0	0	1	2	0	0	4
	上	24	2	4	5	7	0	0	20
	超	3	6	3	1	3	0	3	4
学習者計		76	11	18	16	45	3	8	73

「発話・思考」、「コト」のどちらにしても、修飾節の陳述度が高くなり、意向形、命令形、終助詞などで終わるものになると、「という」無しで修飾させることは不可能になる。たとえば、「京都へ行かない？話」「行こう話」「行ったよ話」のようには言えず、「行かない？という話」「行こうという話」「行ったよという話」のように「という」が必要となる。学習者の使用ではこのような場合も、次の例ようにすべて「という」が使われ、適切であった。

(26)[親がそうなっているのに、〈ええ〉あなた達は何をしているの] 〈んー〉っていう社会状況になっていますから (韓・超級)

(27)[ちょっと、んー、あのー、ま、面接に〈ええ〉来ない] という話で。(英・上級)

さらに、少数ながら、一人の学習者が同じ名詞を「という」をつけて使ったり、つけないで使ったりしている例も見られた。次の例は、同じ学習者(上級中国語母語話者)が「仕事」という被修飾名詞を使った例だが、どちらも自然な使い方になっている。(29)の「機械を取り付ける仕事」のほうは単に仕事の種類を述べており、「という」が入らないほうが自然である。一方、(28)の「日本語を教えるていう仕事」のほうは、「という」を使うことで、インタビュアーに対して「あなたが実際に今しているその日本語を教えるという仕事に」という具体性が高まり、「という」を使うことは適切である。

(28)[外国人に、〈はい〉あの日本語を教える] ていう仕事に、〈ええ〉大変興味を、あの一もたれて。

(29)日本人は向こうであの一、[機械を取り付ける] 仕事があるんですよね。

これらの結果から、全体的に学習者は「という」を適切に使用しており、特に、陳述度が低い修飾節には「という」は使わず、陳述度が高い修飾節には「という」を使用する傾向があると言える。

なお、「コト」の名詞では、超級韓国語母語話者のみ「という」が際立って多く使われていた。超級韓国語母語話者が使用した20例のうち、「という」が使われたものは「というような」を含め 15 例、「ような」のみが1例、何も付加されなかったものは4例であった。同じ超級学習者でも中国語母語話者は13例中「という」は2例、英語母語話者は10例中 3 例である。そこで、超級学習者の使用した「コト」の修飾節を詳しく見てみたところ、中国語・英語母語話者は「ル形」で終わり陳述度が低い修飾節が多く、それぞれ「コト」全体の 69%、70%を占めているが、韓国語母語話者は 30%のみで、それ以外はル形以外の形や終助詞で終わる修飾節であることがわかった。超級韓国語母語話者は、このように「という」無しでは使えない陳述度の高い修飾節を使用しているために、「という」の使用が多くなっていると考えられる。

6. 考察

ここまで見てきた結果をまとめる。

①外の関係は中級から使用されているが、使っている学習者は多くはなくまた使用数も少ない。レベルに関わらず、使用数には個人差が非常に大きい。

②中級では「コト」の内容の修飾節が多く使われるが、上級以上になると「発話・思考」が増える。

③中級では、話や出来事の内容を述べ「名詞＋です」を付加する構造が多く使われていた。一方で、ル形でつなぐ陳述度の低い修飾節も使われていた。

④上級以上でも、「コト」では全体的にル形で接続させ陳述度の低い修飾節が多いが、超級になると、ル形以外の形や終助詞などで終わる修飾節が使われるようになり、特に超級韓国語母語話者は陳述度の高い「コト」が多い。

⑤上級以上の被修飾名詞では、「感じ」「気」「気持ち」が特に多く、モダリティ表現のように使われていると考えられる。

⑥中国語母語話者を除き、被修飾名詞の異なり数の割合が日本語母語話者よりも低い。外の関係の使用数が多い学習者も異なり数は多くはない。

⑦「発話・思考」の大半では「という」を使い、「コト」では使ったり使わなかったりという、母語話者と近い傾向が見られた。「という」の欠落も、「という」の不自然な使用も、少数であった。

上にまとめたように、学習者の使用する外の関係は大きく2つのタイプに分けられる。一つは、ストーリーや出来事の内容を述べて名詞を付加する形の陳述度の高い修飾節、もう一つは、陳述度が低く形容詞的に使われる修飾節である。前者に関しては、中級では「コト」のうちの「話・事実」などを表わす修飾節が使われ、その後「発話・思考」の修飾節が増えている。内容を普通の文のように述べてそのまま名詞を付加する、あるいは「という」でつなげるという形で使用できるため、述べ方さえわかれば

処理的には単純であると考えられる。後者に関しては、「コト」の修飾節ではレベルに関わらずル形を使った陳述度の低い修飾節が多く使われ、前掲の例(14)、(15)のようにテンスを持ちル形以外の形を使ったものは上級までは少なく、増えるのは超級レベルになってからである。内の関係の修飾節の使用も、被修飾名詞の属性・状態を表し形容詞に近い修飾節から進むことが大関(2008)で指摘されており、外の関係でも同様なことが言える可能性がある。

ただし、レベルが上がっても被修飾名詞の異なり数は日本語母語話者に比べ少ないという結果が得られた。一方で、「という」の有無に関して不自然なものは非常に少なく、使い方は適切だった。前述のように、「という」がどのような時に必要かについては議論も多く、学習者に簡単に伝えられるような単純なルールではない。また、中上級の日本語の教科書でも、「という」の有無に明示的に触れているものはほとんど見当たらず、管見の限りでは『現代日本語コース中級』(名古屋大学)に説明が書かれている程度である。では、学習者はどのようにして、自然な「という」の使用に至ったのであろうか。

まず、被修飾名詞の異なり数が日本語母語話者と比べて少ないことからは、学習者が外の関係を文法規則として捉え生産的に使っているというよりも、触れた個々の具体的な用例を記憶し使用していることが考えられる。そして、その記憶された用例をもとに、学習者は徐々に外の関係の構造を発達させていく可能性が考えられる。Ellis (1996)は、言語の習得を「記憶された sequences の習得」と考え、インプットから得られ記憶された「かたまり」のストックが文法習得の際のデータベースとなり、それが分析されて文法化が起こるとしている。さらに Ellis (2003)では、言語習得は、まず formula(かたまり)として取り入れられたものが、徐々に low-scope pattern として自由度の低い「パターン」となり、その後より抽象度の高い文法規則となる、というプロセスが示されている。外の関係の使用において、学習者が「という」が付加できないものに「という」を使っていないのは、「～るタイプ」「～る価値」「～るケース」のような陳述度の低い用例を記憶し使用しながら、徐々に「という」を付加しない「修飾節＋N」の外の関係の習得が進んでいくからではないだろうか。一方で、話や出来事などの内容を普通に述べて名詞を付加したり、「という」を使って名詞と繋げたりという形で覚えた事例が増えていくことで、「陳述度の高い修飾節＋という」という抽象化が得られていく可能性が考えられる。

内の関係と外の関係に関しては、大島(2010: 29)が、「内の関係がいかなる名詞についても成立しうるのに対し、外の関係はある特定の名詞のみが形成できるものである」とし、その修飾構造には名詞の持つ特性が反映されるとしている。したがって、もともと外の関係の構造自体が、内の関係のような生産性の高い構造ではなく、個々の用例に触れて事例ごとに習得していく必要性が高い項目と言える可能性があり、実際に学習者の外の関係の発達過程は、用例を記憶しながら徐々に生産的になっていくという用例ベースの過程をたどっていると考えられる。

7. おわりに

本稿では、学習者が使用した外の関係を調査し、学習者が実際にどのような外の関係を使っているのか、またレベルが上がるにつれ、どう変化するのかを分析した。その結果、学習者は陳述度の高い修飾節と、逆に陳述度の低い修飾節というタイプの異なる二つの構造を、用例ベースに発達させていく様子が観察された。今後、本稿で明らかにした大きな傾向性を踏まえ、母語の影響も含めたより詳細な分析を行なっていきたいと考える。

注

1. 学習者の発話例の〈　〉内はインタビュアーの発話を示している。
2. Type/Token ration は、一般的に文章の複雑さの指標として使われるが、ここでは異なる使い方をしている。

参照文献

上村隆一 (1997)「データベースで調べる」『日本語学』16 (12), 60-68.

大島資生 (2010)『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房

大関浩美 (2008)『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版

加藤重広 (2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房

鎌田修 (1999)「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」平成 8-10 年度文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(1)『第二言語としての日本語習得に関する総合研究』研究成果報告書　335-350.

澤田彩子 (2000)「日本語の関係節の習得について－作文資料とアンケート調査を通して－」『日本語教育学会

春季大会予稿集』196-201.
坂本正・窪田彩子 (2000)「日本語の関係節の習得について」『南山大学国際教育センター紀要』1, 114-126.
高橋太郎 (1979)「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房 75-172.
寺村秀夫 (1975)「連体修飾のシンタクスと意味 －その1－」『日本語・日本文化』4, 大阪外国語大学留学生別科(寺村秀夫 (1992) 157-207 に再録)
寺村秀夫 (1977a)「連体修飾のシンタクスと意味－その2－」『日本語・日本文化』5, 大阪外国語大学留学生別科(寺村秀夫 (1992) 209-260 に再録)
寺村秀夫 (1977b)「連体修飾のシンタクスと意味－その3－」『日本語・日本文化』6, 大阪外国語大学留学生別科(寺村秀夫 (1992) 261-296 に再録)
寺村秀夫 (1980)「名詞修飾部の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座－文法 二』大修館書店 221-260.
寺村秀夫 (1981)『日本語の文法(下)』国立国語研究所
寺村秀夫 (1992)『寺村秀夫論文集 I －日本語文法編－』くろしお出版
長谷川朋美 (2002)「第2言語としての日本語における関係節の習得研究－年少者の場合－」『言語科学会第四回年次大会予稿集』120-125.
山中恵美 (1999)「日本語の名詞修飾節の構造と第2言語学習者」今田滋子先生退官記念論文集刊行委員会編『日本語教育の交差点で：今田滋子先生退官記念論文集』126-137.
Eckman, F., Bell, L. & Nelson, D. (1988) On the generalization of relative clause instruction in the acquisition of English as a second language, *Applied Linguistics*, 9, 1-20.
Ellis, N. (1996) Sequencing in SLA: Phonological memory, chunking, and points of order, *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 91-126.
Ellis, N. (2003) Constructions, chunking, and connectionism: The emergence of second language structure, In C. Doughty & M. Long (Eds.), *Handbook of second language acquisition*, Oxford: Blackwell, 33-68.
Gass, S. (1979) Language transfer and universal grammatical relations, *Language Learning*, 29, 327-344.
Matsumoto, Y. (1997) *Noun-modifying constructions in Japanese: A frame-semantic approach*, Amsterdam: John Benjamins.
Ozeki, H. & Shirai, Y. (2007) Does the noun phrase accessibility hierarchy predict the difficulty order in the acquisition of Japanese relative clauses? *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 169-196.

おおぜき　ひろみ／麗澤大学　外国語学部
hoozeki@reitaku-u.ac.jp

How do L2 learners of Japanese acquire 'outer-relationship' noun-modifying constructions?

OZEKI Hiromi

Abstract

This paper analyzes the use of Japanese noun-modifying clauses by second language learners focusing on "outer-relationship" constructions. OPI interviews of 90 learners of Japanese whose L1s are English, Korean, and Chinese were analyzed, and were compared with those of Japanese native speakers. The results show that (1) learners start to use "outer-relationship" constructions of two types at the early stages, one being the construction in which a highly clausal modifier is attached to a head noun, the other being the construction with phrasal or lexical modifier, (2) type frequency of head nouns that learners used are lower than that of Japanese native speakers, expect for Chinese native speakers, and (3) advanced learners mostly use *toiu* 'appositive *that*' in the similar way as Japanese native speakers, although the rules for when to use *toiu* is very complex. Based on these results, it is suggested that "outer-relationship" constructions are not developed creatively with systematic rules but develop from memorized exemplars (N. Ellis, 2003).

【Keywords】Second language acquisition,　noun-modifying clause,　outer-relationship,　*toiu*

(Faculty of Foreign Studies, Reitaku University)